

「即位の礼」を許さない 一一・一二全国集会に二五〇〇〇人が結集

会場の代々木公園には全国から二五〇〇人を越える人々が結集した。主催者側から「天皇代替りに関する情報センター」の小田原紀雄さんが基調提起、決意表明の後、歴史学者の井上清さん、「わたつみ会」理事長の中村克郎さんから問題提起を受けた。井上さんは「即位の礼」一大嘗祭の強行を通じて天皇の神格化と人民抑圧がもたらされておられることを強く訴え、これを許さないと述べた。中村さんは「日本に天皇制がある限りアジアに平和はない」「元は言っていた。あのとき何故もって反対しなかったのか悔やまれる。私はそのことを胸に、生きている限り訴えたい」と決意を述べた。さらに「全国キャラバン」の報告に続いて北海道から沖縄まで各地の取組の報告がされた。次に「平和連帯会」代表小川武蔵さん、日韓連帯運動から吉松さん、部落解放同盟東京連の藤沢靖介さん、反外資法運動、「海外派兵に反対するネットワーク」の剣持一

死刑廃止国際条約の批准を求めらるフォーラム九〇

二月二日、日比谷公会堂で実行委員会主催により「死刑廃止国際条約の批准を求めらるフォーラム九〇」が行われた。前日から続いていたテーマだったけれど、十分な知識も心構えもなく、しかもほんの少ししか参加できなかったけれど、買って帰ったものはとても重く、大きなものだった。だいたい、なにかの会場についていきなり聞かされたのは上野公園のテーマ。折よくこの頃、夕方には帰らなければならぬという分かった。広い会場は満席までに入った。広い会場は満席までに入らないが、会場外の知人に聞くと二十人は越えているとのこと。



日比谷公園で行われたフォーラム九〇の集まり。多くの人々が参加し、集会の様子が写っている。

「救済」二五七―二五九号には興味深い紹介が掲載されている。その場で配布されていたチラシを一通り読んでみると、この集会に向けて行われた連続シンポジウムの紹介で、それがそのままだけに事情に疎いものにも理解し易い死刑廃止の運動の紹介になっている。丁寧な作り方に感心した。そしてその訴えの二つ二つがとも重く、全部はとも紹介できないので集会での「宣言」の一節を引用する。「死刑は、この社会の中に生きる権利のない人をつくり出す。死刑は、罪を犯した人が、生き続けたいと願った行いを認めないことを不可能にする。死刑は、その執行に他つかわるひとを傷つけます。死刑は、無実の人に科せられたとき、取り返しのつかない結果をもたらします。」

「湾岸危機」と私達にできることへその一

「三多摩パレスチナと連帯する会」の小田切芳政さんに聞く 海外派兵反対運動と国際連帯のありかたは？

「国際連帯協力法」はひとまず廃案になったものの、イラクアラブ情勢は一層政治的・軍事的緊張を強めている。米帝は既にサウジアラビアに二万人もの兵力を投入しているが、一月八日これに加えて来年一月をメドとして、更に一五万人から二〇万人の派兵計画を発表した。併せて約四〇万人もの軍が展開することになる。他方イラクは一月十九日クウェート派遣軍を二〇万人増強することを発表、既にクウェートに展開している約二五万人と併せてやはり四〇万人を越える兵力となる。戦争勃発の可能性は更に高まった。

こいつは国際情勢の下で政府―自民党は公明党、民社党を巻き込んで、「国際平和協力法」に関する覚書」をまとめるなど自衛隊海外派兵のための機を窺うとともに、公然と政敵に向けたキャンペーンを強めている。海外出兵との対決は避けられないだけに、極めて切迫したものとされている。様々な人民闘争の場面で奮闘されている「三多摩パレスチナと連帯する会」の小田切芳政さんに現在の情勢と闘いの課題についてうかがった。

突然のインタビューの申し込みではあったが、快く引き受けてくださった。

地域からのパレスチナ連帯運動

早速ですが、始めに「三多摩パレスチナと連帯する会」の活動について紹介をお願いします。

小田切 発足したのは七〇年代の中頃だったでしょうか。七〇年代の前半はパレスチナ連帯運動といえは、フロント系の人達が取り組んでいたわけですが、七二年のリビア戦争の時期を前後する反赤軍、反過激派キャンペーンと重なって、活動が停滞してしまっています。その中で、当時の西多摩教組の青年部の人で何人かパレスチナ、中東に行ったことのある人達がいて、彼らと人民新聞多摩支部―風林舎というスペースがありました。それがこのスペースが中心になって、多摩の地域からパレスチナ連帯運動をやるようになっていきました。

「湾岸危機」の背景にあるもの

それでは現在のイラク、アラブを巡る情勢について、そもそも何と呼んできたらいいのかというところあたりからお話ししたいと思います。

小田切 私達は「イラクの侵略」とか「湾岸危機」とか言っていますが、パレスチナの被占領地に出ているアルファジルという新聞を読むとHoveyと書いてある。「移駐」と訳したらいいんじゃないでしょうか。やはりその人のスタンスによって呼び方も変わります。

私としてはイラクの行動には賛成できません。「もともとイラクの領土だった」とか言い分はあるでしょうが、上からの下達による武力的解決は、一時的なものにすぎず、人民の積極的意志ではなく結局人民はいつかこたえざるでしょう。イラクとの戦争や国際的な石油価格の低下によるイラク経済の破綻が本

こに東欧の人民運動の影響が及ぶべき、現在の支配体制のみならずアメリカの権益さえも危うい。とりわけ現状では中東にはアメリカの軍事的プレゼンスがない。そこで人民運動の波及と支配体制の動揺を未然に防ぐと共、一挙に中東における軍事的拠点を獲得し自己の権益確保を狙ったものと見ています。これだけの理由があったから、ベトナム戦争以来といわれる大規模な派兵がおこなわれたわけです。

ナシヨナリズムの現在とアラブ・イスラム世界

少し回り道になりますが、先程指摘されたような意味でのマルタ以降の世界の中のナシヨナリズムの今日的なありかた、とりわけアラブ・イスラム世界におけるそれとイラクの地域覇権主義とも言うべき行動とはどう関連するのでしょうか。

小田切 アラブと言っても広いですからね。アラブといふのは本来アラビア語を話す人々という意味です。宗教的にはもちろんイスラムが多数ですがキリスト教、ユダヤ教なども様々なものが歴史的に共存してきた。ただ十字軍以来、外部からの侵略に対して自らのアイデンティティを守るという事柄はあった。現代史のうえでも例えはパレスチナにみられるように、アラブ統一への志向性は強い。その対極には帝国主義の侵略が想定されています。第一次大戦以前にさかのぼれば、アラブはオスマン・トルコが支配していた訳ですが、第一次大戦後、主としてイギリスが他にフランス、ロシア等が介入を強める。支配層は別として、人民のこの帝国主義の動きへの反発は根強いものがあったと思います。クウェートはイギリスとドイツの関係で作られた国です。ヨルダンも元々なかった国です。帝国主義の都合で勝手に国境線が引かれてしまっ。石油に依るアラブの人を言わなければならぬものですね。パレスチナ問題などはその際たるものですね。こうした歴史的背景がアラブ民族主義と言われるものにはある。しかしPLOは違います。PL



集会の様子が写っている。多くの人々が参加し、集会の様子が写っている。

10・28 街へ飛び出せ脱原発

日比谷小音楽堂で行われた集会の参加者は三〇〇〇人程度。派兵問題の最中というところもあって、いたしかたないのかもしれないが、いかにこたえざるでしょう。イラクとの戦争や国際的な石油価格の低下によるイラク経済の破綻が本